The Journal of Kyushu University
of Nursing and Social Welfare
1999, Vol.1, No.1, 313-327

ISSN 1344-7505

言語発達遅滞児のコミュニケーション機能に関する研究

李　玄玉*

A Study about the Communication Function of Children with retarded Language Development

LEE HYUN OK**

Abstract

The object of this research is to analyze vocal and non-vocal level communications by the normal children and by the children with retarded language development. The study aims to examine the characteristics evident in these two groups.

The results show that among the children with retarded language development there are less uses by them of the 'utterance act' implicit witth the descriptiveabilities involving 'things and phenomena'.

Key words: 言語発達遅滞児 (children with retarded language development),
コミュニケーション機能 (communication function), 発話行為 (utterance act)

I. はじめに

今日、子どもの言語において、伝達能力の発達に関する研究には、母親が子どもの表出することばや行為を積極的に解釈し意味づけることによって母子相互作用的過程が成立するという考え方 (Packer, M. J.,1983; Ryan, J.,1974) や、子どもの伝達行動は母親との伝達から母親への伝達へと発達するという考え方 (Tamir, L.,1979) がある。

Griffiths (1979) は、子どもの言語には洞察力のある成人の聴者にとって「情報的」発話と相手に意図を伝達しようとする「伝達的」発話の両方が含まれていることを述べている。これらのことは、非伝達的発話も、それが話者と聴者の共有する文脈に適合するならば、話者について一定の知識をもつ聴者にとって情報性のある発話となり、こうした情報的発話が伝達過程の成立と言語発達に重要な役割を果たしていることを意味している。

近年、言語の伝達機能は、語用論、会話機能とも呼ばれ、最近10年間の幼児言語研究の中で最も関心が持たれてきた領域であり、多くの研究が行われている (Bates, E., 1976; Dore, J.,1975; Halliday, M. A. K.,1975; McShane, J.,1980) 。これらの多くは、Austin (1962) や Searle (1977) の発話行為論を幼児言語に適用したものであり、まだ言語の形式面の発達が未熟な子どもが、ことばをどのように使い、ことばを使って何をしようとするか明らかにすることを意図している。

Bates (1976) は、語用論を「文脈の中での言語の使用を支配している諸規則」と定義し、「意味論的なもの、統語論的なものが語用論的なものから派生する」と述べている。

こうした語用論的観点は言語発達遅滞児における言語の機能面の特徴を再検討する上で極めて有効と考えられる。

そこで、本研究では、1語発話期にある健常幼児と精神遅滞を伴う言語発達遅滞児における音声並びに非音声レベルのコミュニケーション機能を分析し、その特徴及

* 九州看護福祉大学　　**Kyushu University of Nursing and Social Welfare

びコミュニケーション機能の偏りを検討する。

Ⅱ. 研究の方法

1. 対象児

健常幼児2名と精神遅滞を伴う言語発達遅滞児2名を対象にした。

対象児のプロフィールはTable 1に示す。言語発達遅滞児は、各々2歳、2歳半の時に専門機関で「精神遅滞を伴う言語発達遅滞」と診断された。

2. 手続き

対象児はそれぞれの自宅で、子どもと母親の一対一の自由遊び場面を、月に一度40分間ずつ6カ月間、VTRに録画した。遊びに対しては統制を加えず、できるだけ通常の形態をとってもらうことにした。

3. 結果の処理

VTRに録画された子どもと母親の身振り・動作、視線、発話はコミュニケーション活動の文脈と関連づけられながら抽出し、記録用紙に整理した。次に、記録用紙の中から、子どものすべての発話と身振り・動作について、コミュニケーション機能の主要なカテゴリーに分類し、各カテゴリーごとに再整理した。この際、身振り・発話時の状況等も併記した。

言語の認定は、一定の意味を一定の音声で表していることが明らかなものとし、同一の語が繰り返された場合は、全体で一語とした。また、発話間の境界決定は休止とイントネーションを優先させて行った。

子どもの言語行動の認定作業には、2名の評定者がそれぞれ個別に分類を行って両者間の一致度を求めた。この結果、得られた一致度は平均91%である。

$$\text{一致度} = \frac{\text{両者が同一の分類とした発話の総数}}{\text{子どもの発話総数}} \times 100(\%)$$

Table 1　対象児のプロフィール

対象児		性別	生活年齢	発達年齢
健　常　児	N.K 児	男	1:05	
	N.S 児	女	1:04	
言語発達遅滞児	M.R 児	女	3:08	1:06
	M.T 児	男	4:02	1:05

＊ 発達年齢は、津守・稲毛式乳幼児発達検査による。

Table 2 文脈上の地位による発話の分類

発話の類型	分類基準
伝達発話	いわゆる「会話」で,他者に向けられた発話.話しかけと応答が含まれる.
1.話しかけ	子どもがイニシャチブをとって,他者に話しかけた発話.
2.応答	他者が子どもや第3者に話しかけたことばに対して子どもが応答した発話.
1)自発的応答	自発性のある応答. 子どもの応答に先行する他者の発話は質問形式の発話と平叙文形式の発話の場合がある.
・承前	他者の先行発話は質問形式をとらない.他者のことばの内容の一部を話題として会話を展開したり,他者のことばを言い換えたり, 補足したりする発話.他者のことばは必ずしも子どもに向けられているとは限らない.他者のことばを一部引用しても模倣とみなさい.
・同化模倣応答	単なることばだけの模倣でなく,他者のことばも一緒にまねたり,他者のことばに沿った行動を起こした発話.(例,治療者と症児が一緒に 棒に剣を突きさして遊んである場面.治療者が緑色の剣を床からとって「緑,よいしょ」と棒に突きさす.症児もまねして緑の剣を床から とって棒に突きさそうとしながら「オイショ」と発話.)
・非模倣応答	他者の先行発話は質問形式の発話.これに対して,他者のことばを全く引用しないで応答した発話.(例,電池を入れても玩具が動かないので, 治療者「動いた？」→症児「壊れた」.)
・模倣拡大応答	他者の先行発話は質問形式の発話.これに対して,他者のことばを一部引用すると共にオリジナルなことばを付加して応答した発話. (例,「パパはどこ？」→「パパはあっち」)
・模倣応答	他者の先行発話は質問形式.これに対して,他者のことばの一部または全部を引用して応答した発話.ただし, これは,質問のおうむ返しとちがって,応答の内容が行動文脈上適切であることが必要. (例,次の遊びに移る前に,治療者「今度,なに？電車する？」→症児「電車する」と答えて,電車の入っている玩具箱の方へ歩き出す)
2)被誘発的応答	子どもからことばを引き出そうとする意図的,積極的な働きかけの下で,子どもが応答した発話.
・被誘発非模倣応答	子どもが言うべきことばをそのまま直接に提示しないが,子どもにあるきまったことばをいうように求めた他者のことばに対する応答発話. (例,「おーい,くーん.返事がないよー.」→「はーい」)
・被誘発模倣拡大応答	他者のことばの一部を引用すると共にオリジナルなことばを付加して応答した発話. (例,症児バケツに水をくみに行こうとしている.そこで,治療者が許可を求めることを症児に教えようとする.「水を」→「水を入れて」)
・被誘発模倣応答	他者が子どもに言わせようとしたことばをそのまま,あるいは一部反復した応答. (例,遊戯室の窓から母親の姿が見えたので,「お母ちゃーんて呼んでごらん」→「お母ちゃーん」)
情報的発話	他者に向けられた伝達意図のある発話ではないが,非言語的文脈には適合している独語. すなわち,自分を含む現実の世界の一部を表示した独語.表現される内容は多岐にわたる. (例,遊戯室の窓から外にたくさん駐車している自動車をみながら「車のいっぱい」と独特に節をつけていう.床から象のぬいぐるみを抱き かかえながら「象さんをあしょーぶ」という.)
不適切な発話	非伝達的・非情報的発話や伝達的,特に応答的であっても他者のことばの意味内容が理解できなくて不適切に応答した発話が含まれる.
1.単なるおうむ返し	質問形式以外のことばに対するおうむ返し.他者のことばの一部または全部を反復したことが行動文脈上意味をもつと認めにくい発話. (例,治療者が母親に「個人懇談」というと,プラレールの組みたてをしていた症児「こじん,こんだん」とまねしていう.)
2.おうむ返し応答	質問形式の発話に対するおうむ返し.質問に対する答としては不適切なもの.(例,水遊び場面で治療者「ああ,冷た.いや？」→症児「いや？」 →治療者「どっち？」→症児「どっち？」
3.不適切応答	質問形式の発話に対して,質問の意味内容を誤解した応答. (例,砂遊び用具を玩具箱から取り出している場面.治療者が赤色のバケツを手にもった状態で「バケツと何が要る？」あと, バケツと何が要る？」とたずねると,症児「青」と答える.この例では,色名が間違っているが,これは無視してよい.)
4.文脈不適合独語	非言語的文脈と無関係な独語.(例,バケツに水をくみながら「コックローチ」)

綿巻ら(1984)による

4．分　析

1）発話の伝達性と情報性

発話の伝達性と情報性を調べるために、個々の発話をその文脈上の地位によって分類した（Table 2）。資料の分析、分類にあたっては、次の6つの基準と綿巻・西村・佐藤（1984）を参考にして行った。

① 発話の内容が話者の行動や周囲の状況と関連をもつか。

② 発話に伝達意図があるか。

伝達意図の有無は、話者が聴者の方を注目する、聴者の方に接近するなどの行動が発話に伴うかどうかによって決定した。

要求や命令のように聴者に何かすることを求める発話は、こうした行動上の特徴がみられなくても伝達意図があると判定した。

③ 話者がイニシャティブを取った発話が、相手の話しかけに応答した発話か。

④ 発話が話者のオリジナルなことばで作られているか、先行する他者のことばを引用しているか。

⑤ 発話が自発的に出されたか、相手からの積極的な働きかけによって引き出されたか。

⑥ 他者のことばを模倣した場合、それが単なる模倣か、それとも他者のことばを共有、同化しようとしているか。

以上の基準にしたがって、発話が伝達的であったか、非言語的文脈に適合していたか、自発的であったかという3つの基準を最も重要視して分類した。

ここで、伝達性のある発話とは、「会話」という範疇で括られた発話のことであり、情報性のある発話とは非言語的文脈に適合する独語であると定義する。

2）発話の実用機能

実用機能という用語は2つの意味を持つ。1つは、言語の社会的、対人的意味や効果を示す。こうした用法は、Austin (1962) やSearle (1969) の発話行為論やHalliday (1975) に見られる。もう1つは、言語の使われる文脈、例えば、発話時の行為や周囲の事象や話者の意図と言語の使用との関係を示すのに用いられる。これは、Bates (1976) の実用論やDore (1975) の原初的発話行為論に見られる。ここでは、実用機能という用語を後者の広義の意味で用いることにする。

したがって、実用機能の分析の対象となる発話は不適切な発話を除いた伝達的発話（会話）と情報的発話である。

Dore (1975) は、子どもの1語発話－原初的発話行為 (Primitive Speech Act; PSA) －は、単なる成人発話の省略形ではなく、質的に異なるものであるとし、基本的に意味内容となる命題はもたないが、未成熟な関係指示表現 (rudimentary referring expression) と発話の力 (primitive force) から成立していると考えた。そして、この原初的発話行為 (PSA;Primitive Speech Act) は、文脈や表現形態の音調曲線等からの分析によって8つのPSAに分類される (Table 3)。

本研究の対象児における発話の実用機能別分類にあたっては、Dore (1975)、Doreら (1978)、Halliday

Table 3 原初的談話行為(PSA)の分類基準表

原初的談話行為(PSA)	子どもの発話	子どもの非言語的行動	おとなの反応	文脈的特徴
命　名	語	対象ないし事象に注意する：おとなにさし向けられていない反応を期待していない	ほとんどの場合ない：子どもの発話を反復することが時たまある	子どもによって注目された，目立つ特徴が示される：事態には変化はない
反　復	語または韻律的パターン	発話する前におとなの発話に注意する：おとなにさし向けられていない：反応を期待していない	ほとんどの場合ない：子どもの発話を反復することが時たまある	発話に注目されている：事態に変化はない
応　答	語	発話する前におとなの発話に注意する：おとなにさし向けられている	子どもの反応を待っている：子どもが発話すると，返答することが多い：つぎに行為を遂行する	発話に注目されている：子どもの反応がおとなの反応を促さないかぎり，事態に変化はない
行為要求	語または顕著な韻律的パターン	対象ないし事象に注意する：おとなにさし向けられている：反応を期待している：合図の身振りをたいていおこなう	行為を遂行する	子どもとおとなによって注目された，目立った特徴が示される：対象ないし子どもの状態に変化がある
回答要求	語	おとなにさし向けられている：反応を期待している：対象に関しての身振りをおこなう	反応を発する	事態に変化はない
呼びかけ	語または顕著な韻律的パターン	おとなの名まえを大声で発することによって，おとなにさし向けられる：反応を期待している	子どもに注意するか，子どもに応答することによって反応する	子どもが発話する前には，おとなは若干離れたところにいる：典型的にはおとなの定位は変化する
挨　拶	語	おとなあるいは対象に注意する	挨拶発話をかえす	談話事象は開始され，あるいは終了する
抗　議	語または顕著な韻律的パターン	おとなに注意する：おとなにさし向けられている：おとなの行為に反抗ないし否定する	子どもが嫌う行為をおこなうことによって，おとなのほうからさきに談話事象をはじめる	おとなの行為が終結するか，あるいは子どもが行為を防ぐ
練　習	語または韻律的パターン	特定の対象ないし事象に注意していない：おとなにさし向けられていない：反応を期待していない	反応なし	発話に関係のあるような文脈の明瞭な側面は存在しない

Dore(1975)

(1975)、McShane (1980)、村井 (1970) の研究を参考にしながら、以下のような8種の機能（綿巻ら、1984) に分類した。

(1) 道具機能：話者が自分の要求を充足させるために聴者から物やサビースを得ようとして使われた発話。これには、手に入れたい物、してほしいサビースなどを直接に表現した直接的要求と、話者に陥っている状態を聴者に訴えかけることによって、その状態を除去、変更してくれるように聴者に求める間接的要求が含まれる。

(2) 規制機能：聴者の行動を方向づけるために使われた発話。

この機能は道具機能と類縁性が極めて高い。しかし、道具機能では話者の要求を充足させることが発話の第1目的であるのに対して、規制機能では聴者の行動を統制することが発話の主目的である。これには、聴者が遂行すべき行動直接的に表現した命令と、聴者にある行動をするように促したり誘いかける勧誘、聴者のおかれている状態や将来起こると想定される状況を指摘することによって聴者がある一定の行動を遂行するように求める警告、話者の態度や意志を表明することによって聴者の行動に統制を加えようとする意志が含まれる。

(3) 質問機能：聴者に言語反応を請求する発話。

これには、情報の提供を求める情報請求と、判断の提供を求める判断請求、許可や同意の提供を求める許諾請求が含まれる。多くの場合、情報請求はWH型の疑問文、判断請求と許諾請求はYES-NO型疑問文の形式をとる。

(4) 応答機能：他者のことばに対してことばを返す発話。

応答機能は、応答に先行する他者の発話の種類によって質問への応答と、質問形式以外の発話への応答に分かれる。前者には、情報提供、判断提供、許諾提供が含まれる。後者は、他者のことばを引用したり、言い換えたり、コメントを加えたりする応答である。その場合、応答が自発的であるか、被誘発的であるかについては無視した。したがって、質問形式以外の発話への応答には、他者からの呼びかけや挨拶に対応した社会的対応と、他者のことばを同義的に言い換えたり、他者のことばに関連する情報を補足したり、他者のことばを訂正したりする換言・付加・訂正、他者のことばに応答することによって相手から情報をもって引き出そうとする応答質問、他者のことばを繰り返す反復が含まれる。ただし、単なるおうむ返しや質問の意味内容を誤解した不適切な応答は除外する。

(5) 対人機能：他者との社会的・感情的交流をはかるために使われた発話。

この種の発話は、多くの場合、命題的意味を伝達するためのものでなく、話者の聴者に対する感情や態度を伝達するために使われる。これには、他者との接触をはかるための呼びかけ、社会的慣習的表現としての挨拶、他者の注意を自分に向けさせようとする注意喚起、感謝、賞賛、同情、批難、などのように話者の聴者に対する態度、気持ちを伝える態度が含まれる。

(6) 報告機能：話者の知っている情報を聴者に伝える発話。

これは、伝えられる情報の内容によって、話者自身の個人的行為経験、感覚、感情を伝える個人的事象と話者の周囲を取り巻く現実や状況や第3者の行動や状態を伝える外的事象に大別される。

Table 4 発話タイプとその出現頻度

発話の類型	健常児(N.K児)			健常児(N.S児)			言語発達遅滞児(H.R児)			言語発達遅滞児(H.T児)		
	1:5-1:6	1:7-1:8	1:9-1:10	1:4-1:5	1:6-1:7	1:8-1:9	3:8-3:9	3:10-3:11	4:0-4:1	4:2-4:3	4:4-4:5	4:6-4:7
伝達的発話	392(64.3)			392(65.3)			265(67.1)			314(66.1)		
・話しかけ	41	90	103	49	97	101	39	48	55	59	94	85
・応答	30	53	75	28	49	68	35	39	49	23	27	26
情報的発話	16(2.7)			14(2.4)			9(2.2)			7(1.5)		
（文脈適合独語）	3	8	5	3	4	7	3	4	2	3	3	1
不適切な発話	196(32.1)			190(31.7)			113(28.7)			141(29.7)		
・不適切な応答	2	1		4	2	1	1		1	1	1	
・文脈不適合独語												
・単なるおうむ返し	64	34	26	60	25	23	19	16	28	28	29	31
・質問のおうむ返し応答	29	21	19	31	23	21	13	14	21	17	16	18
曖昧な発話	6(0.9)			4(0.6)			8(2.0)			13(2.7)		
・話しかけか文脈適合独語か	1						2	1	1	1		1
・質問のおうむ返し応答か模倣的応答か	1		3		2		1	2		3	2	1
・単なるおうむ返しか同化模倣応答か		1		1	1				1	2	1	2
計	171	208	231	176	203	221	113	124	158	137	173	165

(7) 会話調整機能：会話を円満に進行させたり、ことばの中断を埋めたり、他者のことばの明確化を求めたりするための発話。

(8) 表示機能：他者に話しかけたり、応答したりするために発せられたのでなく、話者の行為や内的状態、話者の周囲の外的事象を表示した独語。

これは報告機能と同じ様に、個人的事象と外的事象に大別される。

個人的事象には、話者がこれから遂行しようとする行為やその意図を表示した予告・意図、現に遂行している行為や直前に遂行した行為を表示した進行中・近過去、見立て遊びやごっこ遊びを行っている最中にその内容を表示した想像的遊びが含まれている。これらをまとめて行為と呼ぶ。このほかに、個人の感覚や感動などを表出した内的状態が個人的事象に含まれている。外的事象の表示には、周囲の存在物を認定し名義的に名付けたり指示したりする認定・命名、存在物が固有にもつ大きさ、色、形などの物理的属性や、ある一定の事象が繰り返し起こったりすることや社会関係の中で物に付与された属性、例えば物の所有者などを表示する物に関連するコメント、物が存在することやその発見または存在しないことを表示した存在・非存在、存在物の動き、変化、状態を表示した動き・状態・変化、書いてある文字や数字を声に出して読む文字・数が含まれる。

Ⅲ. 結　果

各児それぞれ6カ月間結果の検討は、2カ月単位で3期に区別して行われた。

各対象児で観察された発話のタイプとそれぞれのタイプにおける出現頻度は、Table 4 と Fig.1 に示した。

伝達的発話においては、健常児と言語発達遅滞児ともに、年齢上昇に伴う発話量の増加が観察された。特に、M・T児は、話しかけの頻度が全発話の50.1%に達している。M・R児は、話しかけと応答の割合がともに30%以上であった。

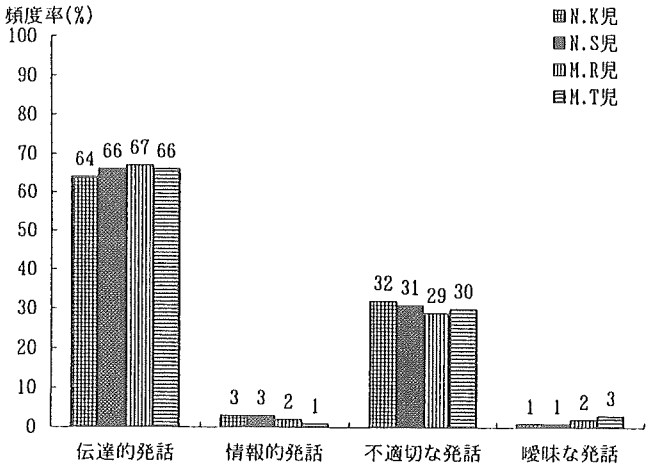

Fig.1 発話タイプとその出現率

単なるおうむ返しは、言語発達遅滞児より健常児の方に多くみられ、これが最も多く観察された時期は、健常児の場合、観察初期であったが、言語発達遅滞児の場合、観察後半であった。また、健常児と言語発達遅滞児において単なるおうむ返しの発話は、いずれも、母親のことばの一部を即時的に反復するもので、そのほとんどは母親とのことばのやりとり遊びに発展した。

伝達的発話と情報的発話の実用機能別出現頻度は、Table 5と Fig.2に示した。

健常児とM・R児に共通した特徴として、他の機能に比べで応答機能が最も多かった。特に、M・R児おいては、応答機能が発話全体の44.9%で非常に多くみられ、表示機能（14.1%）も多くみられた。M・T児は、実用機能の1つか2つかに発話の実用機能が著しく偏るということもなく、バランスよく分布している。

道具機能の発話は、他の機能の発話が個人によってみ

Table 5 伝達的発話の実用機能別出現頻度

発話の類型	健常児(N.K児)		健常児(N.S児)		言語発達遅滞児(M.R児)		言語発達遅滞児(M.T児)	
	発話数	適切な発話*中の割合	発話数	適切な発話中の割合	発話数	適切な発話中の割合	発話数	適切な発話中の割合
道具機能	75	18.4(%)	88	21.8(%)	79	28.8(%)	64	19.9(%)
規制機能	32	7.9	34	8.4	11	4.0	22	6.9
質問機能	3	0.7	5	1.2	8	2.9	73	22.8
応答機能	158	38.7	145	35.7	123	44.9	76	23.7
対人機能	2	0.4	3	0.7	14	5.1	9	2.8
報告機能	4	1.0	2	0.4				
会話調整機能								
表示機能	134	32.9	129	31.8	39	14.4	77	23.9
計	408		406		274		321	

* 伝達的発話と情報的発話の総称

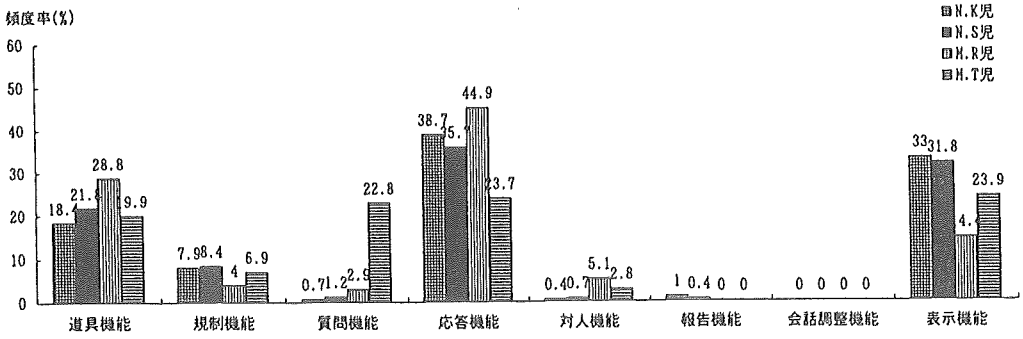

Fig.2 伝達的発話の実用機能別出現率

られたり、みられなかったり、あるいはその割合が大きく違っていたのに対して、4名の全対象児に共通して18～30%を占めている。

Ⅳ. 考　察

本研究では、健常児との比較を通して、1語発話期にある言語発達遅滞児のコミュニケーション機能の検討を行った。

健常児と言語発達遅滞児は、他者のことばに対してことばを返すという応答機能を十分に示しており、対人関係に問題のない言語発達遅滞児ではコミュニケーションそのものにはほとんど問題がないといえる。ところが、子ども自身が発話のイニシャティブを能動的に取らなければならない言語行為においても問題がないとはいえない。特にM・R児では、Austin (1962) の発話行為論で分析された「発話内行為の力」(illocntionary force) を離れた純粋な意味での「発話行為」、即ち、物や事象の記述機能をもつ発話の使用が少なかった。これは、純粋な意味での「発話行為」の未発達が言語発達の遅れの一因となっていると考えられる。

一方、M・T児では、「発話行為」が行動行為全体の中で重要な地位を占めている。とりわけ、M・T児における発話の実用機能別頻度の分布パターンは、綿巻 (1983) の研究で見られた健常児のパターンに非常に類似している。もちろん、M・T児の1語発話の指示的意味や意味機能などについて検討をしないと明言することはできないが、「意味論的なもの、統語論的なものが実用論的なものから結果として派生する」(Bates, 1976) とするならば、M・T児の言語は単純な遅れとみなすことができるだろうと思われた。

参考文献

Austin, J. L. (1962) : How to Do Things with Words. Oxford University Press, London . (坂本百大訳：言語と行為，大修館，1978).

Bates, E. (1976a) : Language and context : The acquisition of pragmatics. Academic Press, NewYork.

Bates, E. (1976b) : Pragmatics and sociolinguistics in child language. In Morehead, M.,& Morehead, A. (Eds.) Language Deficiency in Children: Selected Reading. 411 - 463, University Park Press, Baltimore.

Bernard - Optiz, V. (1982) : Pragmatic analysis of the communication behaviour of an autistic child. Journal of Speech and Hearing Disorders. 47, 99 - 109.

Dore, J. (1975) : Holophrases, speech acts and language universals. Journal of Child Language, 2, 21 - 40.

Dore, J., Gearhart, m.,& Newman, D. (1978) : The structure of nursery school conversation. In Nelson, K. (Ed.) Children's Language, Vol.1, Gardiner Press, New York.

Halliday, M. A. K. (1970) : Language structure and language function. In Lyons, J. (Ed.) New Horizons in Linguistics. Penguin, Harmondworth. (田中春美監訳：現代の言語学. 大修館書店, 1973)

Halliday, M. A. K. (1975) : Learning how to mean : Exploration in the development of Language. Arnold, London.

岸　学・須藤貢明・近藤伸子 (1980) ：初期言語のコ

ミュニケーションモデル. 特殊教育学研究, 18,7 - 14.
小林重雄・佐竹真次・前川久男・進藤桂子 (1988) ：乳幼児コミュニケーション発達検査にみられる言語発達遅滞児の伝達行動の変化. 「障害幼児を中心とした治療教育法の開発と統合化に関する研究」, 昭和62年度厚生省心身障害研究報告書, 93 - 102.
李玄玉 (1997)：自閉症児の相互作用的な伝達機能に関する行動論的アプローチ. 筑波大学大学院博士論文.
McShane, J. (1980) : Learning to Talk. Cambridge University Press, Cambridge, Mass.
村井潤一 (1970) ：言語機能の形成と発達. 風間書店.
Packer, M. J. (1983) : Communication in early infancy: Three common assumptions examined and found inadequate. Human Development, 26, 233 - 248.
Rutter, M., Mawhood, L., and Howlin, P. (1993): Language delay and social development.
Specific Speech and Language Disorders in Children. Fletcher, P. (eds.), London: Whurr Publishers. 63 - 78.
Searle, J. R. (1969) : Speech Acts: An Essay in the Philosopy of Language. Cambridge University Press, Cambridge, England.
綿巻　徹 (1981) ：初期文法獲得期の発話の数量的特性. 日本心理学会第45回大会発表論文集, 506.
綿巻　徹 (1983) ：統語発達に遅れのある就学前精神遅滞児の言語－会話構造と一語発話の実用機能－. 昭和57年度文部省科学研究費「発達障害児に対する言語能力の形成プログラムの開発に関する教育心理学的研究」報告書, 81 - 98.
山根律子・河合万里絵・金谷京子・澤田俊子・松崎みどり (1986) ：言語発達遅滞児の言語使用における発達的特性. 第24回日本特殊教育学会大会発表論文集, 390 - 391.